

「確かな学力の向上をめざす学習指導に関する研究」

～言語活動の充実による授業改善～

I 主題設定の理由

「これから求められる学力」の観点から

学校教育法第30条では、学校の目的として

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

が示され、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」に加え、「思考力・判断力・表現力等の育成」が重視された。この「思考力・判断力・表現力等の育成」のためには、説明や解釈、伝達、表現などの言語活動が重要である。そのため学習指導要領「総則」でも、言語活動の充実が明確に位置づけられており、指導計画の作成等に当たっての配慮事項として、言語環境を整え、言語活動を充実すべきことが明記された。

そして、各教科等においても、それぞれの教科等の特性や指導事項に即しての言語活動が示された。PISA 調査において日本の生徒の学力について課題があると明確にされた「テキストから情報を取り出し、解釈、熟考・評価し、自分の考えを記述する力」の育成のためには、このような各教科等における言語活動は欠かせないからである。

山梨北中では、言語活動の充実による授業改善を図ることを通し、様々な状況や場面に応じ、適切に思考、判断し、表現することができる生徒を育てていきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の方法と内容

1 言語活動の充実による授業改善

今年度は一昨年から取り組んでいる「全教科、領域を通しての言語活動の取り組み」を念頭に、日々の取り組みや研究授業の授業実践を通して研究主題をさらに深める取り組みを行った。

今年度は、初任者の先生の育成のため、初任者の先生が「言語活動の取り組み」を踏まえた理科・道徳の2回の研究授業をおこなった。また、初任者の先生が所属する学年とは別の学年からも、道徳の研究授業をおこなった。

このように「全教科、領域を通しての言語活動の取り組み」に関して互いに学びあう取り組みを行った。研究の組織として、全体研究会と各部会（教科指導研究会・学年指導研究会）を組織し、テーマに向けて取り組んだ。

全体研究会では、本校の取り組みでめざす生徒像を設定するとともに、各部会の発表や各研究授業における生徒の発表の様子から成果と共通の課題を考えることを通して、互いに学び合った。

言語活動の充実の目標は思考力・判断力・表現力等を育てることである。山梨北中生の

課題点を考慮して「様々な状況や場面に応じ、適切に思考、判断し、表現することができる生徒」を研究でめざす生徒像として設定した。そのために、「記録・要約・説明・論述・討論・発表など」をポイントとして言語活動の充実に取り組むこととした。

そして、教科指導研究会から発表される「取り組みのポイント・取り組み内容」、各学年指導研究会から発表される「指導案・取り組み内容」を全員で検討した。また「受信→思考→発信」の過程を取り入れた活動を授業で行うという基本的な考え方の確認を行った。

2 学力向上の取り組み

さらに、本校生徒のための「学力向上の取り組み」として、言語活動の充実を図った授業改善以外に、毎日提出する「自主学ノート」の取り組み・英数の希望制習熟度別補習（山北サポートタイム）・朝学習の時間をつかっての作文「根拠をあげてその感想を書く」練習・家庭学習時間を年間継続して記録する取り組みをおこなってきた。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- (1) 生徒の実態をふまえた研究テーマを設定できた。
- (2) 3回おこなった授業研究では、毎回県の指導主事に来校いただき、言語活動の取り組み方法を深めることができた。
- (3) 自主学習ノートの取り組みを全学年おこなった結果、「山梨北中学校診断調査アンケート」において、生徒の「自分から進んで家庭学習をしている」保護者の「子どもは、家庭学習の習慣が身についている」の項目の数値が、昨年度より上がった。自主学ノートが、家庭学習の習慣化および家庭学習時間の増加につながっていると考えられる。
- (4) 英数特化の「山北サポートタイム」は、基礎学力に不安を感じている生徒が、英語科・数学科の教員から直接指導してもらえたり、質問できる時間として、とても有効だった。
- (5) 課題作文の取り組みは、はじめのうちは規定字数を書き切れない生徒も数多くいたが、回数を重ねるごとに、時間内で規定字数を書き切れる生徒が増えていった。
- (6) 「家庭学習時間記録ファイル」の取り組みは、集計結果を三者懇談の資料として活用するなど、有意義なものとなった。

2 課題

- (1) 管理職を含め、全校一丸となって、今後とも継続的に取り組むことで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育て、集団の力の向上をめざしていきたい。
- (2) 言語活動をすることが目的でなく、その活動を通して思考力・判断力・表現力を伸ばすことが大切である点にこれからも意識して取り組む必要がある。
- (3) 学年間、教科間の実践や研究の成果を共有するとともに教科間、あるいは学年間の働きかけ（相互作用）をより効果的に活用したいと考えている。
- (4) 学力向上の取り組みについては、今年度ある程度の成果が得られたので、さらによりよい取り組みを目指し、研究・改善を進めていきたい。

（研究主任 鈴木 学）